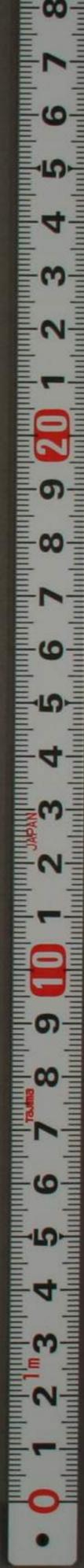


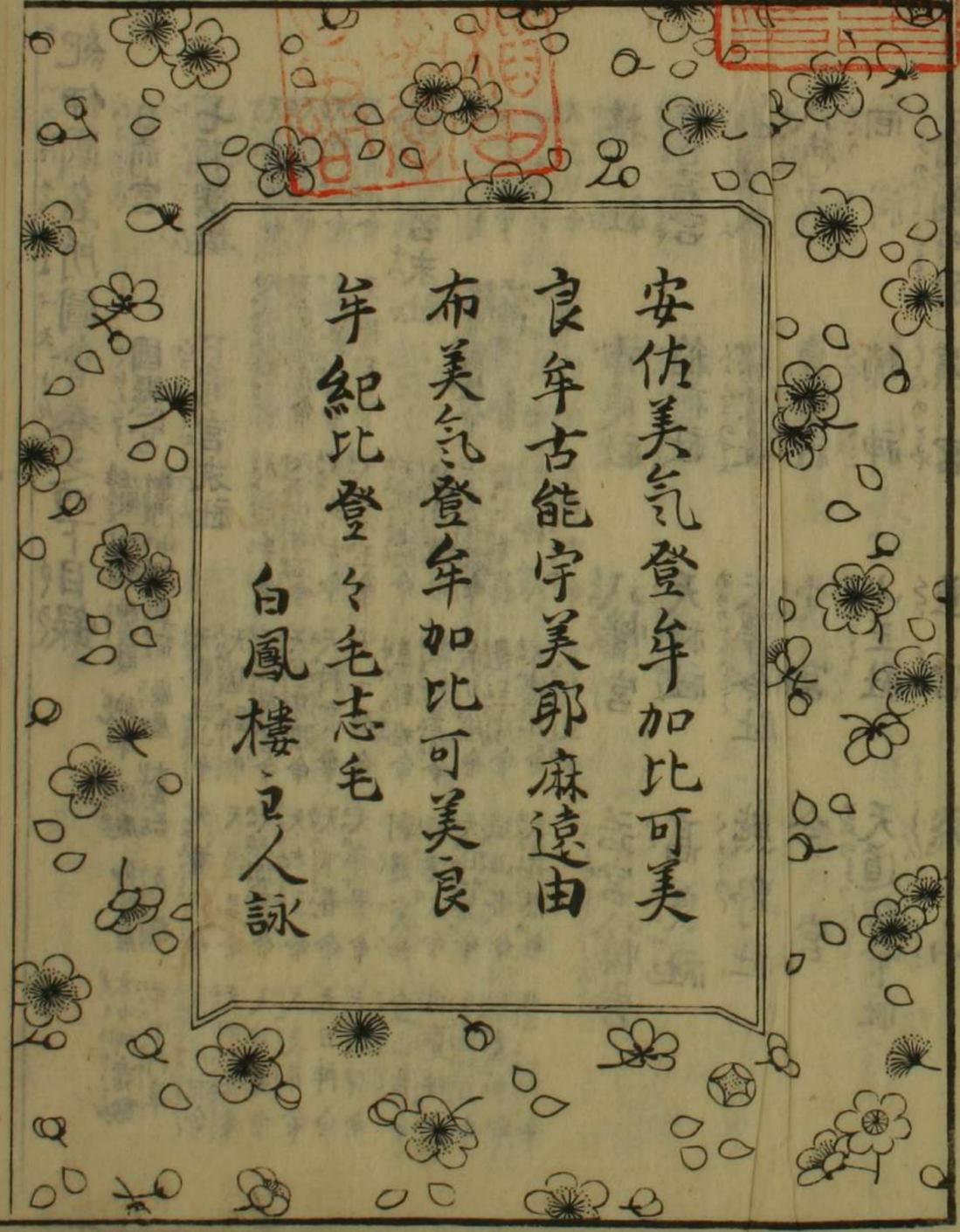
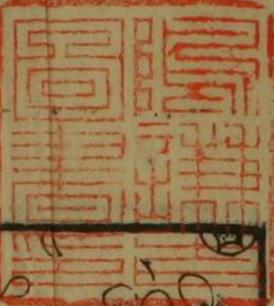
紀伊國名所圖會

四之卷下  
名草郡

JL 4  
325  
7

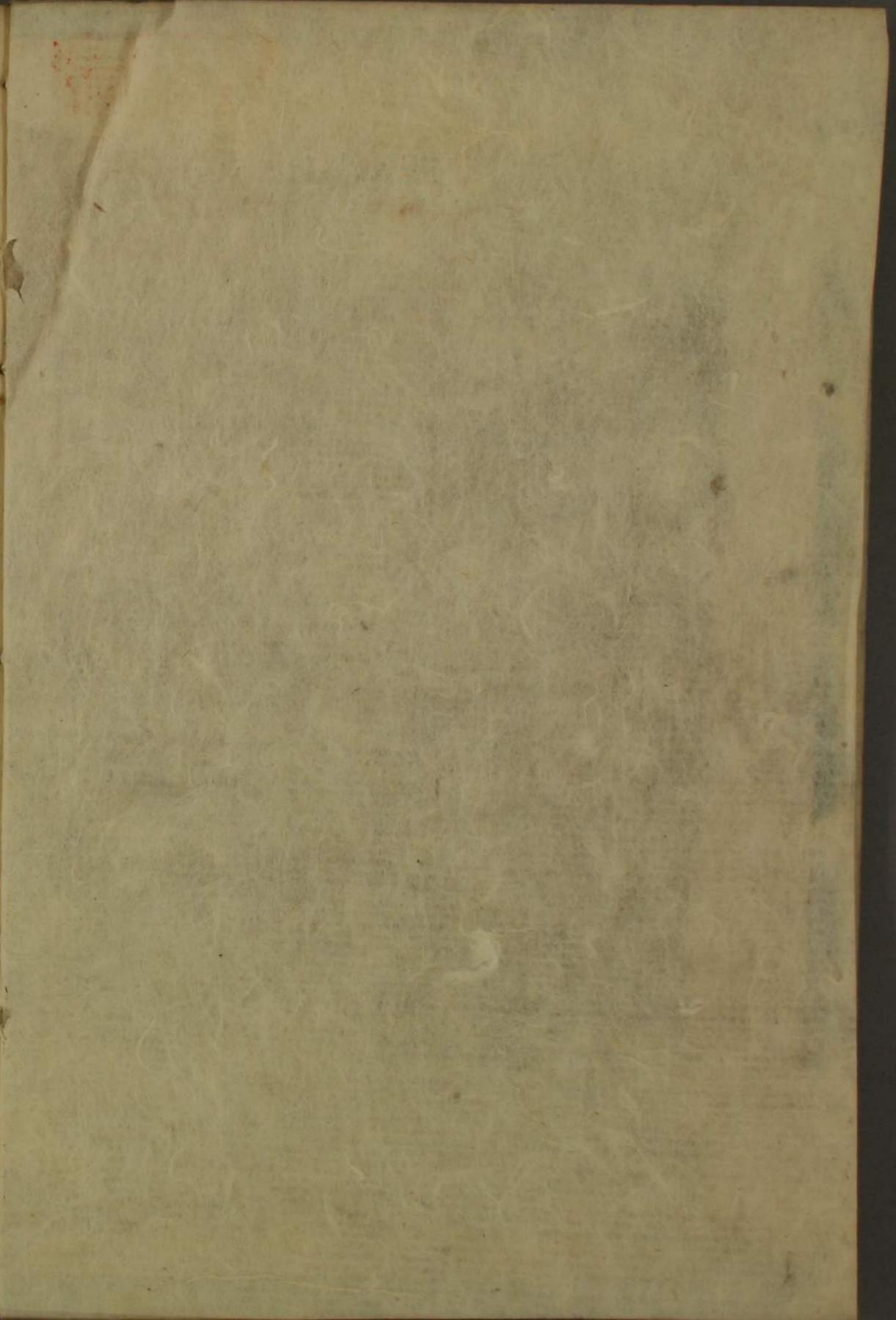


呂門  
325  
卷7



安仿美氣登年加比可美  
良年古能守美耶麻遠由  
布美氣登年加比可美良  
年紀比登々毛志毛

白鳳樓主人詠



紀伊國名所圖會卷之四下目録

日前宮

七瀬榎枝

國縣宮末社

市夷社

狹荷社

深草社

專女社

楠神

天首箇命社

國縣宮

日前宮末社

市夷社

狹荷社

深草社

專女社

楠神

天首箇命社

八幡宮

天神社

穴宮

山王社

草宮

飛山

若宮八幡宮

高良社

熊野社

今宮

天道根命社

飛山

神畔

麻鳥比賣神社

忌部里神社

鳴武神社

香都知神社

岡崎御

岡崎御坊

須佐神社

伊太祁曾神社

妻河前社

辨財天祠

白山権現

天宮

紀伊國造殿館

古社人職名

天満宮

大長坐持神社

鳴神社

廢光德寺

生魚石

都麻津比賣社

奈久智王子

平尾王子

丹生神社

足守神

國造家曆代

古社役人

藥德寺

直水谷

撰社

堅真音神社

満願寺

日限寺

普門寺

末社

觀音寺

足守神

溝の内

大日堂

鎮守社

音浦樋

ちかこの例

鎮守祠

宝光寺

大師堂 鎮守所

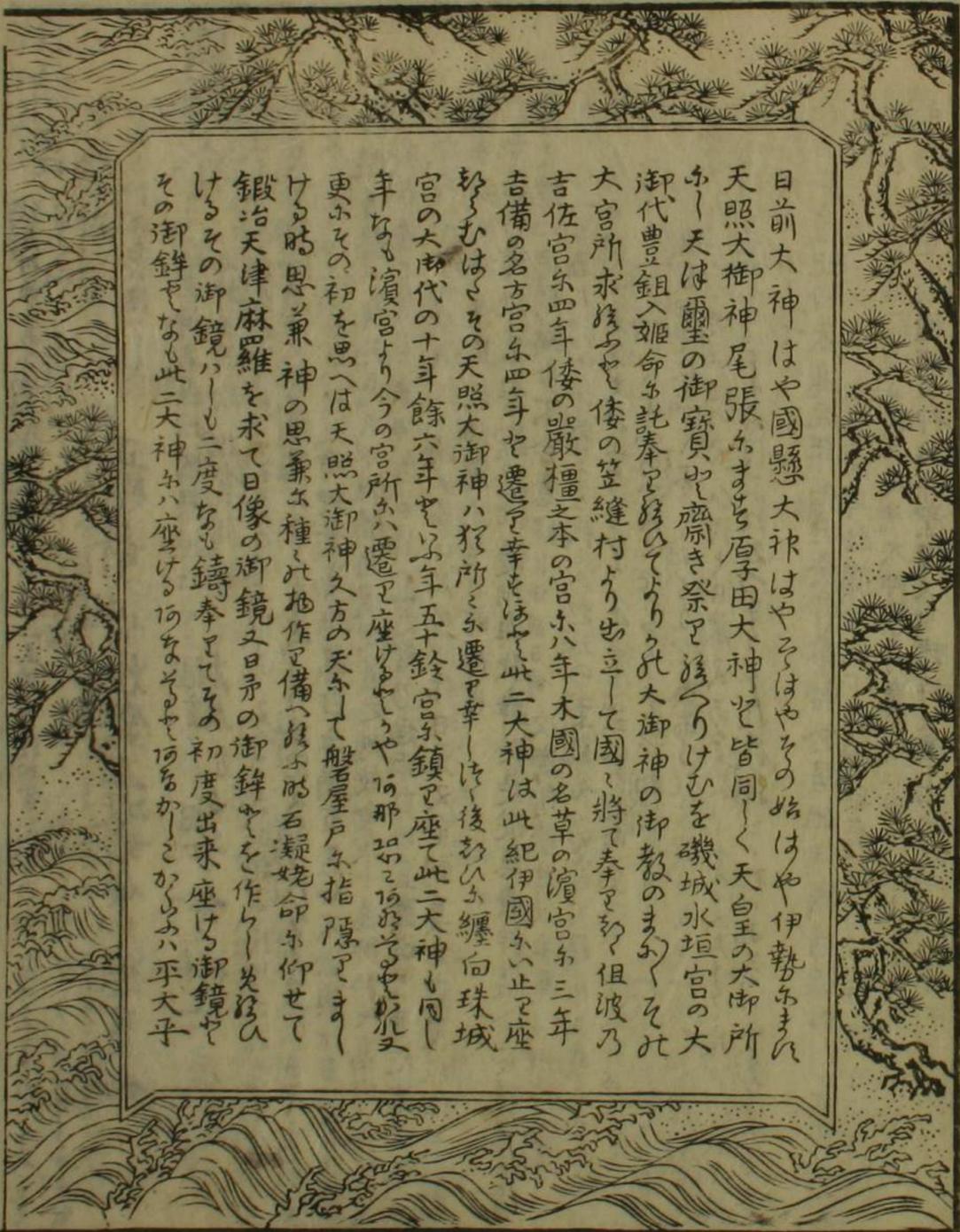
最初之拳

願成寺

観音寺

西光寺

日前大神はや國懸大神はやその始はや伊勢の  
 天照大神尾張のまら子田大神也皆同く天白王の大神所  
 かし天は爾の御寶也祇園祭に注りけむを磯城水垣宮の大  
 御代豊鉏入姫命を託奉り給ひてより此大神の御教のまのく  
 大宮所求給ひや倭の笠縫村より出立て國に將て奉り給ひ但波乃  
 吉佐宮の四年倭の嚴福之本の宮の八年木國の名草の濱宮の三年  
 吉備の名方宮の四年遷り幸をばや此大神は此紀伊國の止り座  
 移りむはさその天照大神ハ所より遷り幸し後むは纏向珠城  
 宮の大御代の十年餘六年より年五十鈴宮を鎮り座て此大神も同し  
 年にも濱宮より今の宮所へ遷り座けりや何那所より給ひや  
 更ふその初を思へは天照大神久方の天より船屋戸を指隠りま  
 けり時思兼神の思兼も種に地作を備へ給ひ給ふ時石凝姥命を仰せて  
 鍛冶天津麻羅を求て日像の御鏡又日矛の御鉾を作り給ひ  
 けるその御鏡ハ二度にも鑄奉りてその初度出来座ける御鏡や  
 その御鉾や此二大神ハ座ける何なるや何なるかこかし平大平



日前宮

伏見村西あり延喜式神名帳日前神社名神大月次相嘗新嘗○ひのくまのえもなまきつるを  
今世は佐々木とていふに  
正殿日前神。相殿左石凝姥命。右思兼命。

國懸宮

日上神名帳曰國懸神社。相殿左細女命。右玉屋命。

代々一書曰上畧故天照大神謂素戔嗚尊曰汝猶有黑心不欲與汝見乃入于天石  
窟聞着盤戸鳥於是天下恒闇無復夜晝之殊故會八十萬神於天高市而問之時  
有高產靈之息思兼神者有思慮之智乃思而白曰宜圖造彼神之象而奉招請  
也故即以石凝姥為治工採天香山之金以作日矛又全剥真名鹿皮以作天羽鞞用  
此奉造之神是則紀伊國所坐日前神也

○古語拾遺曰上畧舉庭燎俳優相與歌舞於是從思兼神議令石凝姥神鑄日  
像之鏡初度所鑄少不合意神紀伊國日前次度所鑄其狀美麗大神也下畧  
○次下は國懸神社の事史記の云ひに日懸神社ありては神也と云ふに  
○次下は國懸神社の事史記の云ひに日懸神社ありては神也と云ふに  
○次下は國懸神社の事史記の云ひに日懸神社ありては神也と云ふに

○日本書紀曰朱鳥元年七月癸卯奉幣於居紀伊國國懸神○文德實錄曰  
嘉祥三年十月甲子遣左馬助從五位下紀朝臣貞守向紀伊國日前國懸天神  
策命云天皇我詔旨止掛毛畏幾大神等乃廣前仁申給倍申久先允神財奉進在村  
申賜此故是以種種乃神財乎潔備天令捧持天奉出此狀乎聞食天天皇朝廷乎常磐

堅磐仁護幸奉賜比天下平安亦矜賜比助賜怖恐美忍稜申給破久申云々○同書曰  
貞觀元年七月十四日散位從五位下紀朝臣宗守為日前國懸兩社使○今集解仲  
冬上外相嘗祭註曰紀伊坐日前國懸伊太祁曾鳴神以上神主等請受官帛祭  
○延喜式曰日前社一座絹四足絲三納四銖綿八屯五兩調布六端八尺木綿二竹八  
兩酒縮百束又臨時名神祭部曰日前神社國懸神社云々○公卿補任曰高倉院兼  
安三年七月七日藤原範光任紀伊守安元二年十二月八日遷任下野守日前國懸社造  
立之間依祖母之服改任之 ○中右記曰寬治五年十二月七日今日上卿參陣擇  
申日前國懸社過宮日時○東鑑曰嘉祥四年六月九日紀伊國日前宮營作事付成功  
而可造畢之旨依被宣下將軍家所令舉申之任人等于今不進其功之間有社司  
之訴仍無未濟可致沙汰由被仰下云々○和名按曰國懸神戶日前神戶

風雅集 神依松 紀 俊 文  
家集 紀 俊 長  
家集 紀 行 文

△日前宮(奉)らり撰集の奇又近代堂主奉納の奇數ありて思  
近は領邦安社(奉)るなり一奇因に津額の書ハ  
一條右府忠良公  
轉法輪大納言公修卿  
飛鳥井大納言雅威卿  
太政大臣大納言經久卿  
菊亭大納言尚季卿  
久世前大納言通根卿  
平松前中納言時章卿

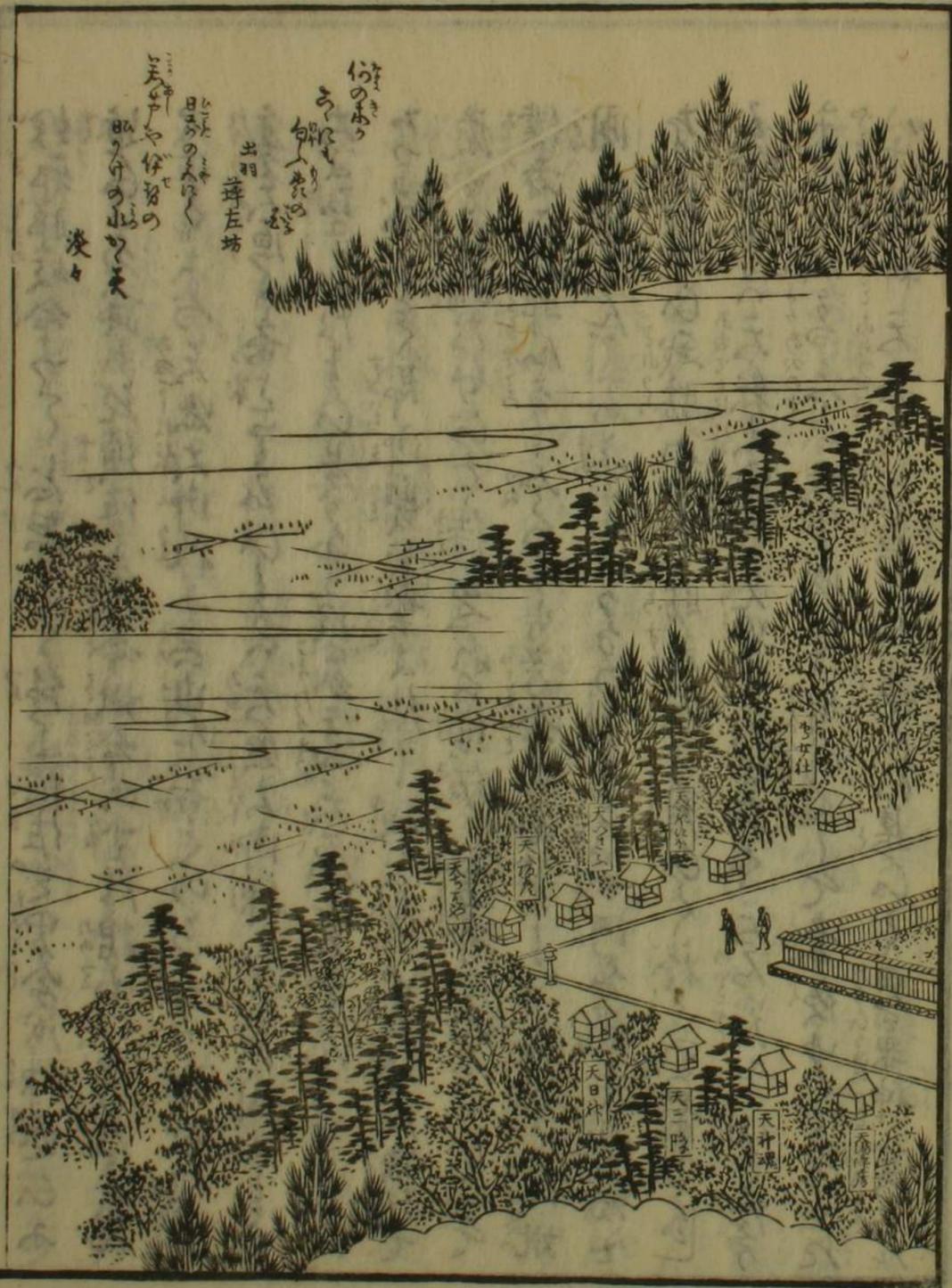


宮居る神のあまに國をく兼んすらなりあゝか  
 飛鳥在兵衛督雅光卿  
 池尻宰相暉房卿  
 此神のあまに國をく兼んすらなりあゝか  
 鷲尾中将隆純朝臣  
 紀の海やあまの海のうらみけく國をく兼んすらなりあゝか  
 野宮少將定許朝臣  
 日本大神神と称し奉る神聖代の神鏡國懸大神神と称し  
 奉る神聖代の日矛にまゝて共天照大神神の前雪にま  
 まらり候邪那波命修邪那美命に終妻之誓したる  
 遂に坐雲乃橋の小門に袂被りてあまの終り成るる  
 神三柱まゝと長初と天照大神神次を月讀命次を建速  
 須佐之男命と称し奉るは是天照大神神のまゝに  
 所を月讀命の夜之食團を所ちて建速須佐之男命  
 海原乃初極其依はなるまゝに不知る中須佐之  
 男命の所を國と名けりて唯位は位深なきいふ山也  
 海も個もてて無神もててて妖しくに世に散るるがたふ



其二

四ノ光八





ひまよりて貴とん林のましまんゆへはの故我楽も  
と此とん天見屋命太玉命の鏡とて出くこれとみせ  
まろけまて天照大神林金壽とておかしと戸より出  
る所とて隠立し天手力大神林手瓜とて出まろ  
を命端虫之繩を沖後方み引してけうちあうり  
今まてとておかしと原むび天下園くりあて明  
くおかしとて八十萬神等とて議とて終は須佐之男  
命と千位置戸を負て其原瓜焼るを林邊に遊む  
と今侯勢國守治郎五十鈴川上とて信とてまた大神林の  
御霊代とのと坂樹よりけし神鏡にまて今一箇の鏡  
鏡むび日矛の前神雲とてまておかしとてたる天と  
ありと大神彦持齋とてある瓜皇孫天津彦火瓊杵  
とて瓜原乃中津國に大君とて天治りまてけり付

大恩大神林はむはくしと神乃天御璽とて瓜二柱乃  
瓜は雲をも副へ賜ふとて吾神魂をわら瓜を瓜并が  
こく床とて日とて殿とてもけしとて堂敷まろたまてと詔  
とて瓜とて瓜二柱の神等供たりと日向園とて千穗家  
に天照とてまて彼種々の神等を并敷まろたまひぬ  
白檀原宮とてあわのまてとてしめしとて神日本船とて余天  
皇のまて日向の園より東征たまら皇宮にまてとて  
まろて忠誠とて忠切あり瓜の寝る所とて瓜とて瓜道根  
今と紀國瓜物とて園造とて彼二柱の瓜は雲を瓜  
まてとて瓜とて瓜當園とて瓜まろまてとて初あり  
瓜と此瓜道根命とて瓜の皇孫乃天津彦火瓊杵  
に侍りたまひ瓜二柱の神等の瓜は雲を瓜とて紀  
姓乃遠祖にままん

編者曰ちまあつての國造家々來の旧化の証に...  
...又證考左のおと...

而求服人天洋麻羅而料伊斯許理度賣令今作後...  
...取天金山之威

石凝姥命に於て八咫の鏡を以て...  
...今二箇の神鏡を以て日矛の前神を以て...

二種の前神靈と別賜...  
...二種の前神靈と別賜

天道根命の紀國を賜ひ國造と...  
...二種の前神靈を以て



水鏡の白  
 神代よりついで  
 きて鏡のついで  
 うつりて神宮  
 になりまは  
 一日前にか  
 ま今ついで内侍  
 かんま内侍  
 所よりまは  
 まはりまは

日影を  
 鏡を  
 鏡を  
 鏡を

室千種三十二神等前驅防衛ありて其三十二神等の内各記の中は天道根命の  
見入るる事ありて饒速日命の天降る事ありて其全事の述べる事ありて其  
書信やまらぬ事ありて其供奉の神等の名を厳重にあらせらるる事ありて  
言ひ目之ハ野々實の皇孫乃天降まるとの供奉の神ならぬ古記ありて  
はたつた地とありて其饒速日尊の饒速日尊の神作らる事ありて  
彼記の記のゆかりの記をよみて其國造家の旧記にて正しければとありて  
又目前宮未社三十二座の神は彼供奉三十二神の社と云ふ皇孫の供奉の神と云ふ  
は是れ其の明證なりと云ふ饒速日尊の神ありて其論ありて其神の  
神の神子と云ふ知難く天照大神神の神子孫の神と云ふ本居大人の古事記傳  
論よりかひの皇孫天降まるとの疑へりて其を  
兩宮鎮座の事國造家旧記をかんがふる皇孫命天降ま  
のちの兩宮の御靈代二種乃神寶共日向國高千穂宮  
の齋まつらるる神武天皇東征ありて其  
天道根命の二種の御靈代を托しまつらるる事ありて  
うにまつらるる事ありて其本を遷す事ありて  
又毛見御の遷す琴浦なる巖の事と拜する事ありて是  
此國の御鎮座の事ありて其宗神天皇五十二年豊御

入姫命天照大神神の御靈をなす當國名草濱宮は座  
まゝなる付兩大神を也琴浦より濱宮を遷しまつて爰に並べ  
多かるて凡て三年は五十四年十月天照大神神の吉備國  
名方濱宮より移りなす事ありて兩大神は地止をまつて垂  
仁天皇十六年今の萬代の宮より鎮座たるひたり此の  
あろく朝廷より忌部の工匠に勅命あつて社殿を造り先  
たまふ往古兩宮諸殿式ありこれより朝廷より御修  
造絶つて中古より鎌倉將軍家をなす世々の武將勅  
をなすこと久修宮をなすことありて其社の結構善美を  
はく境地の封域廣大なることありて其の事ありて其  
兵亂は荒蕪一尔未小祠を營くありたる瓜寛永四年  
國君の眷顧のより再興ありて其の事ありて其古の  
むらけとすことありて其の事ありて其の事ありて其の事ありて



神領と他領とのさし証文ありたよ出せり

日前國懸社所遷宮時四面四至糾定郷々支

北 乾 西 坤 南 巽 東 艮

北	乾	西	坤	南	巽	東	艮
他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領	他領 神領
六十谷庄道 若鷲カ島	本有本郷 カ称名島	北有本郷ノ道 同シ有本郷	小宅郷 西嶋 西島 大田郷 西島 吉田郷 本島 新島	毛見郷 大崎海 毛見郷 大崎海 毛見郷 大崎海 毛見郷 大崎海	舟尾郷 冷海 冷海 冷海 冷海 冷海 冷海 冷海	湯橋庄 忌部郷 冷海 冷海 冷海 冷海 冷海 冷海	直川庄上ノ芝原 有間郷 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄 湯橋庄

右嘉禎元年御遷宮ノ時之四面四至任先例同シ四年九月廿五日依彼糾定令注進之状如件

嘉禎四年戊戌九月廿五日 紀伊國司從五位下源長信

兩宮注右年中仍事之名目大概 他法次者未畧之

○正月

小朝拜 元日 二日 三日 政始 二日巳後七日以午前撰吉日  
 献外杖 上卯日 献破竹 六日 白馬節會 七日  
 御酒水迎 十日 上宮市酒造祭 有勤始上宮者國懸宮也十日  
 都鎮部市祭 十四日 十五日 踏歌 十五日於草宮前有踏歌  
 鎮部市祭 十六日 早且 御鉞山所祭 十六日御鉞山者和佐高山也  
 名草彦市祭 十七日 名草彦市祭 十八日  
 大歳祭 廿八日 下旬撰吉日自中古用 堰祭 下旬撰吉日

草宮荷前 晦日九毎月如此

○二月

朔幣十列 朔日九毎月如此

○三月

大小荷前 三日

御種子下祭 下旬撰吉日

○四月

供齋燭 八日

氏神御祭 上申日

御田方祭 下旬撰吉日

○五月

供昌蒲蓬 四日

供稔 五日

荷前里神祭 十五日九毎月如此

草宮荷前 三日十五日

○本宮祭 晦日

御佐利御祭 上寅日

珠津真祭 撰吉日元若三月下旬也

吾自今日至十日夜国造参籠

御田道祭 下旬撰吉日

○六月

五上申 上旬撰吉日自中古定八日

三之方祭 下旬撰吉日自中古用廿五日六日之間

名越之夜 同日

○七月

進素餠 七日

日前宮御穗取始御祭 十日

下宮專女御前御祭 十六日下宮八日前宮也 專女御前八未社也

○八月

草宮田宮土祭 時正撰吉日

八月夜 上中旬撰吉日

草宮荷前 十五日

草宮荷前 同日

津萬年幾祭 十五日

草宮荷前 廿日

奉祭 晦日

○九月

一日今日被定臨時祭流鏑馬射子

中言御祭 上旬撰吉日

毛見中言社祭 九日

静火市祭 十五日入夜於草宮  
有宵曉之祭

名草姫市祭 十六日

相撲内取 廿五日

後宴 有散赤白拍子勤  
其役々廿七日

○十月

一日 又今日奉納幣於兩宮之室藏  
次第與六月朔日同

宮奉行渡之祭 廿三日

調庸市祭 下旬撰吉日自中古  
定廿六日畢

○十一月

日前宮相嘗祭忌固祭 一日

鳴神社祭 上卯日

氏神祭 上申日如四月

國懸宮市總上御祭 十五日

名草彦市祭 十七日

丹生大明神入所 早且入所草宮十六日

流筒馬 廿六日

○一 年々祭

菴引祭 元者九月也十五日以前撰吉日於  
中田浦有此儀

珠津島市祭 元者九月也撰吉日  
其次第如四月

中言社昇祭 廿七日

栗寫祭 同日

伊左衽曾祭

高大明神祭 上酉日元中西日也

相嘗市祭慶盃造祭 三日

慶盃起祭 七日

市麴合祭 十日

黒市酒造 撰吉日

御殿用市祭 十四日

玉殿壯市祭 十六日

大集祭 十八日

○十二月

國懸宮相嘗祭忌固祭 一日

黒市酒造 撰吉日

相嘗市祭 十五日

市解除市祭 相嘗市祭自今日至  
十九日四夜之神事畢

小集祭 十八日

同慶盃伏祭 五日

市穗下祭 九日

白市酒造祭 十三日

相嘗市祭 十四日

市解除市祭 十五相嘗市祭自今日  
至十八日四夜之神事

小集祭 十七日

庭立祭

市酒水迎 十二日夜也

市殿用市祭 同日

玉殿壯市祭 十七日

大集祭 十九日

庭立祭 廿日

荷前 廿七八日但依大小

季祭 晦日

あまの式等神領及収の後とて行なることあり  
今わづらふのこころを記の條目を

○三月元日 小朝拜 七日 白馬神事 十四日 都鎮部祭 成の郡西又の  
百餘部とすまはるる人々もまはるる祭の事と

○四月朔日 流瀆とありて國中の祭とす  
○九月廿六日 計利馬ありし時とす  
○十月十八日 日前宮の榎掌祭成の郡西又の  
計利馬ありし時とす

○十一月十九日 國多々の榎掌祭成の郡西又の  
計利馬ありし時とす

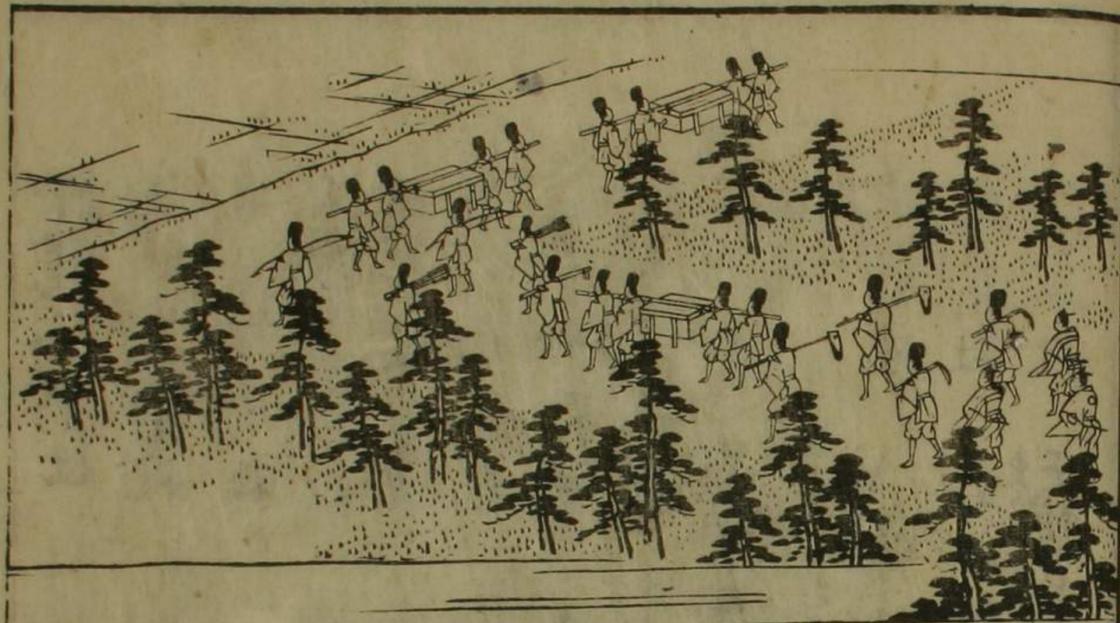
○岩手堀祭 岩手の堀とありて  
○七瀬禊祓 此作事式の國造職儀神の  
たけのこどもなり七瀬の地なり

○日前宮末社  
○天香詰山令社  
○天糠戸令社  
○天兎屋根令社

天榎野令社  
天御蔭令社  
天玉櫛彦令社  
天乳速日令社  
天少彦根令社  
天櫛玉令社  
天村雲令社  
天斗麻苾令社  
天三降令社  
天造日女令社  
天湯津彦令社  
天八坂彦令社  
天玄湯彦令社  
天太玉令社  
天伊岐志速保令社  
天下春令社  
天神玉令社  
天背男令社  
天明玉令社  
天世手令社  
天神魂令社  
天伊佐布魂令社  
天表春令社  
天斗女令社  
天日神令社  
天活玉令社  
天月神令社

○國懸宮末社  
つと三十日 日前宮 瑞籬の外四方に羅列と

向々廻馳令社  
金山彦令社  
草野姫令社  
級長戸切令社  
軒遇安智社  
級長津彦令社



天明五己  
九月廿七日  
七瀬大後  
神幸諸  
班列



経津主命社

武甕槌命社

閻魔社

天津彦根命社

活津彦根命社

手刀雄命社

天日鷲命社

手置帆負神社

彦投知命社

天穗津大来目社

塩土老翁社

豊玉彦命社

埴山姫命社

岡象女神社

少童命社

大山祇命社

天熊人社

天徳日命社

天膏根命社

豊玉命社

天忍日命社

天目一箇命社

天押雲命社

天神立命社

以上二十社國懸宮瑞籬の外四方に羅列と

○撰社 二十座宮中の所々にあり

市夷社

八幡社

春日若宮

稲荷社

天神社

高良社

住吉社

深草社

天穗日命社

相殿大己貴命

熊野社

新宮

八御子社

西宮の神借依りて居るを八御子と云ふ

穴宮

穴宮は神の居る所を指す

楠神

楠神は神樂殿の神

皇社

天逆根命社 天月一箇命社

○同撰社

瀨宮

瀨宮は西宮の神

○殿舎

神庫

神庫は神樂殿の神

神炊屋

神樂殿の神

三井垣

三井垣は神樂殿の神

○飛山

飛山は神樂殿の神

○神畔

神畔は神樂殿の神

神樂殿の神



辛代 親文

從三位南朝の御子なりて人なり勅撰の御書

辛代 俊長

侍從俊三位果威俊長の子なりて人なり勅撰の御書

二十代 行文

辛代 行長

從五位上大膳大進の御子なりて人なり勅撰の御書

○園造家城跡

在田有より御書あり

○古の社人職名

白冠 二人

人母 二人

行事 二人

以上六神官と稱す

推行事

相見 二人

大肉人 二人

火焼 二人

推内人 二人

大桑主 二人

以上中臈

酒守 一人

土師 一人

御琴引 一人

茶主 廿五人

内人 一人

以上下臈

○古の社役人

青侍

人なりて古の社人なりて九月に奉還馬共余御書ありて令勤仕

宮奉仍

宮中の御書ありて社人なりて

伶人

巫女 八人

驗子 廿人

出納

中間

大工 一人

小工 二人

引頭 一人

權守 一人

以上小工を教ふ是

鍛冶 二人

土器師 二人

檜皮師 二人

檜物師 二人

墨大工 二人

繪取 二人

尾立 二人

樂頭

相撲

白拍子

御書ありて

溝の内

日本文七歌の御書の其一なり

麻呂比賣神社

律儀村にありて古の社人なりて

天満宮

日村にありて古の社人なりて

瑠璃光と普照院藥徳寺

日村にありて古の社人なりて

位像モニ尺ノ寸

○芦原藥師堂

作はるるす

○本尊の御書あり

當寺茶師あつていも不安置あんちしなる茶師あつていの像さうもいねる  
 上うへなりし者もの瓜うりたつわう此こゝ所ところの只ただ彫たうたる苦く茶ちや師しを  
 人のすむべし家いへ居ゐりたるまは地ちをいねと名な成なるは  
 もきしきつる此こゝ原はらより堂だうふあぞ夜よにに妙めうたる  
 ふう瓜うりたるらしうはたしう遠とほ近ぢか人のもるふきくふ  
 まつてゆき瓜うり押おしおるふ不ふ名な議ぎも医い王わう大だい空くうの  
 像さうゆる赫こくとして出現しゆげんましくぬ群むらわらんくたるこ  
 りぬたれもるあるたふはを渴かつ作さく隠いん者しやあこ  
 けは別べつ草そう堂だうのなまを不安置あんちしけるまま瓜うり  
 より出現しゆげんたるしる人ひと不ふ名なの世よにせりき芦あし原はらの薬やく師し  
 如來にょらいの傳でんつり其そのころ人ひと皇みかど三十九代さんじゅうきゅうだい天てん智ち大だい皇みかど夫そのの下  
 まりしぬは付つたりしうかこも此こゝゆらりまき  
 ともいふし帝みかどの歡えん感かんたるめるはなまき有あるふ  
 四  
 四

芦原薬師如來  
 出現の所



曰く殿塔の莊嚴きくしちち造営ましく留情光の  
額をのびけりりひくくちと宮寺まかゝ勅願の論を  
たぬりくくはふまゝ法好くはらり靈験目くにあ  
らさるりち七十四代鳥羽院上皇然野御幸なりたまひ  
し加がきけたりも鸞輿とまぐりし十君の宮庭過とこ  
むけこそ人の容儀わらばとあひさしに還都の後薬師  
の尊像一尊と勅賜たりし人  
そもく十君の天子熾光に感と鳳輦とまぐりたまひて  
いばまも御帰依ありせありとゆるとまぐりけのまも  
ありに保太皇の冥慮我朝有縁の尊像とまぐりたま  
又出院草創のむしありし法相三論有智の尊僧勅を  
ましく主勢とまぐりまも台門の庇徒ありてありたる  
中葉以降四海兵刃やじとたきく唐火のまぐりもけ

かそく堂舎のまぐりも色とまひ終る所伽とる法除もあ  
るまにたのび我若の正流園道徳え養上人諸國遍山  
のほく當ちんりりく通夜ありまもふはくの唐出の  
夫慈如弥陀薬師の三佛の奉りて二尊今念佛乃  
法門にま代有縁のまもふは此地に止るまもみずみず  
念佛の道場とまぐりありし上人親在踊躍ふた  
つたまにたのびく大い勸進し唐の衣をこりてまも  
しよ後して此巨刹とまぐりねまよりしそのち先國王  
法中家より田園と寄附せられ尚國君のまもり代  
御帰依ありしまも免許の地ありし  
○什物茶厨画像寄附院○秋込像思養茶○浄土曼陀羅  
彩者はるび○十六羅漢像幅寄附院寄附院寄附院  
秋日吳故藥徳寺底譽上人 中洲

雲棲曾解津梁芳風月徜徉意更高逝矣

丹砂嗟日短滿天雨色共蕭騷

忌部里神社 井邊村あり○去人これと本の前より ○祀る神天を玉神

古事記小布刀玉命者忌部首等之祖也 姓氏録右奈

神別小齋部宿禰乃皇產靈子天を玉命の後なり

○又曰玉命率諸部神供奉其職如大上儀云々

首の祖と云る古語拾遺曰天を玉神所率神名曰天日乾命

手置帆負命 彦狭志命 櫛明玉命

天目箇命 又曰令玉命率諸部神造

和幣云々又曰玉命率諸部神供奉其職如大上儀云々

其長たる由の姓なりと云まこと玉命と云る同書小玉皇

産靈神男大日命房をりたり 延喜式神名帳



津奈天満宮

紀藩

桃林

梅の花

秋里

梅の香

能日知

奥州守積

羽冥

梅の花

秋里

梅の香

能日知

奥州守積

羽冥

千早太

麻呂社

里村

有家村





たるに難波長柄を承知 孝徳天皇 白雉四年に忌部首作を新  
を神官頭 今の祓紙 伯耆 伯耆に新しき一ひし小作加美新が後其職とほぐ  
しあつたに心づかして漸く衰微し淳和原朝 天皇 白鳳  
十二年天下の万姓とありたありりるゝ八等の位階と定め  
あるに既に中臣氏あり二の位階をあらたまふに忌  
部氏あり一等と賜へり其の宿祢とありありこれ則  
廣成が古語拾遺とありりるゝその漸く下りりるゝ  
を歎く 所以ありふと云

延喜六年日本紀之竟宴得太王命

物部安興

比佐嘉多行所麻豆流呵美乎伊能留度曾要多母  
須惠く亦奴佐波志互氣留

大夜笠持神社

西の津波と云 犯る神手置帆負命

本國神名正一位

○日本書紀神代卷に天津彦火瓊瓊杵乎此言余乃

中津國を馭するんがめおとす日向日の穂日高千穂  
の峯よ天降りまに波小日於經津主神以岐神為御守周  
流削平有逆命者所加斬戮順者仍加褒美是時神頭  
之首渠者大物主神及事代主神乃合八十萬神於大市  
師以昇天陳其誠款之至時高皇產靈尊勅大物主神  
汝若以國神為妻吾猶謂汝有疏心故今以吾女之穗津姬  
配汝為妻且領八十萬神永為皇孫奉護乃使還降之  
即从紀伊國忌部遠祖于置帆負神定為作笠者彦狹  
知神為作盾者天月一箇神為作金者天日鷲神為作本綿者櫛  
明玉神為作玉者乃使右玉命以弱肩被右手繼而代伊予以奈  
此神者始起於此矣且天兒屋命主神事之宗源也故俾以左占  
之下事而奉仕焉云

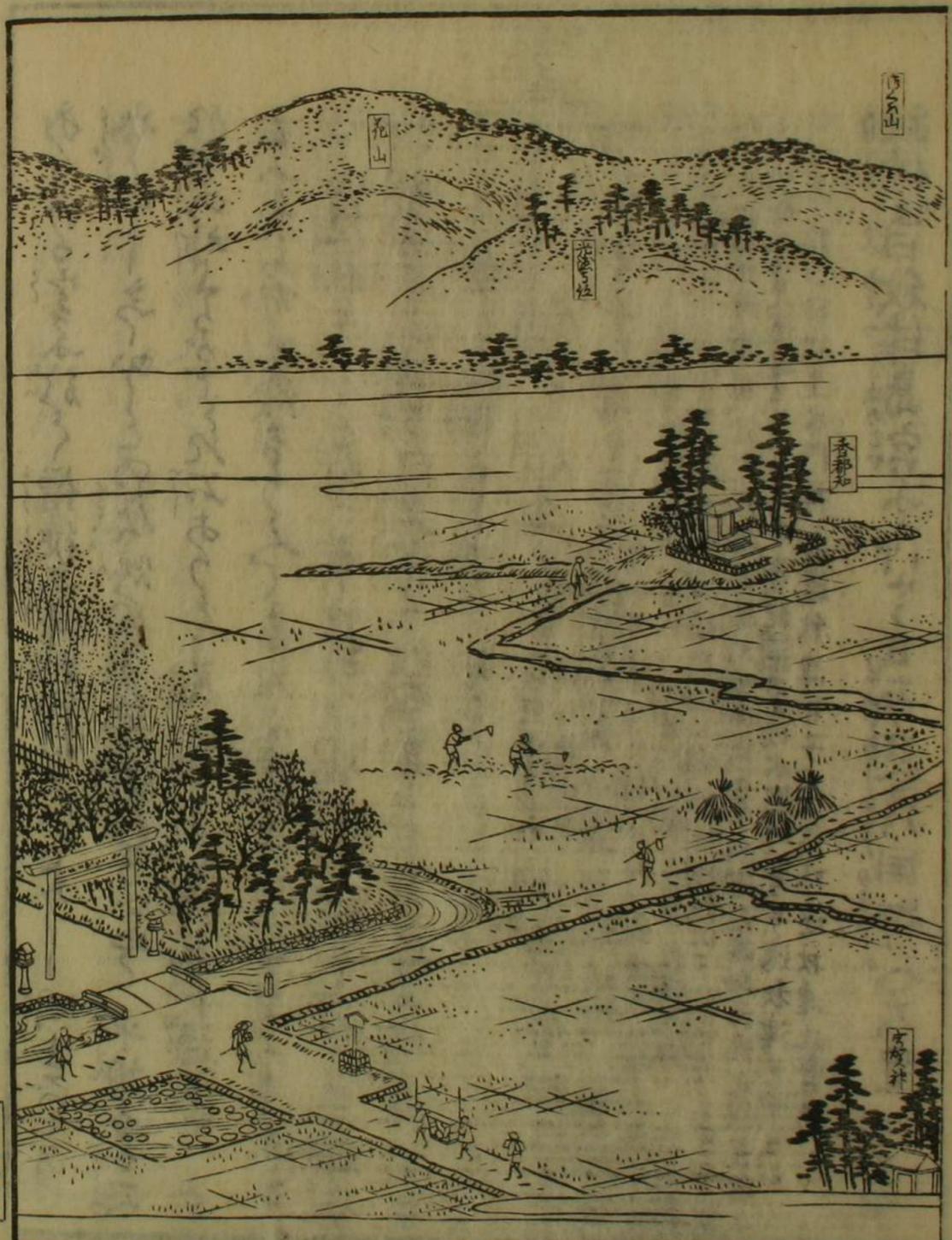
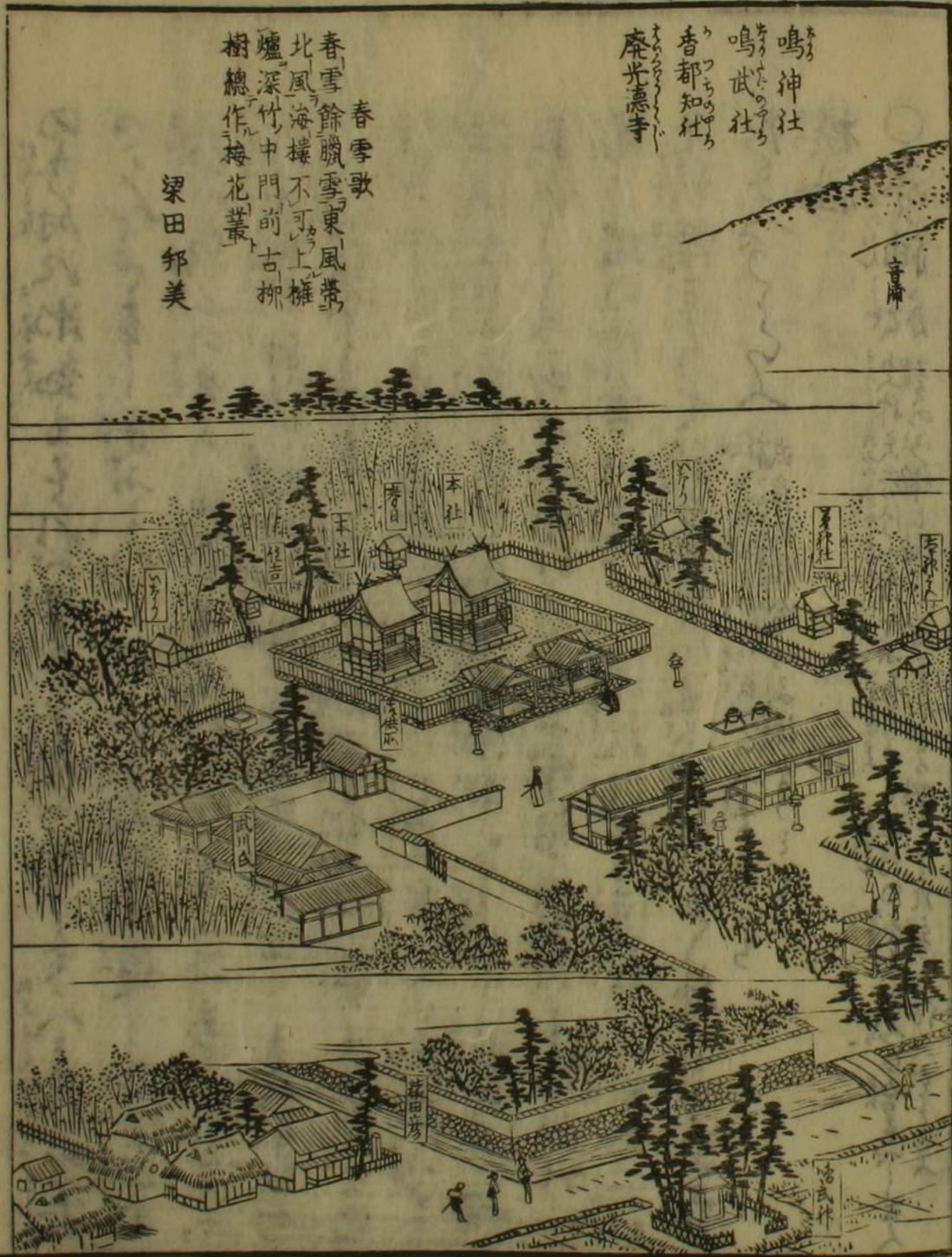
按は左治指邊の神手置帆負命と櫻田國の神也  
同書に令天宮令率手置帆負彦狹知二神と記す其意今在紀伊心之宮於伊本  
鹿香二師と云 神社の事下記す



鳴神社  
鳴武社  
香都知社  
庵光德寺

春季歌  
春雪餘臘雪東風帶  
北風海樓不可上  
柳爐深竹中門前古柳  
樹總作梅花叢

梁田邦美



の市村に御免もさぬ此名草郡小溜して人民乃多若  
 天香語の命の後瀛津世親命を奉り神ありておろ  
 らく水門神速秋は日神に敬齋をけりまじかのら  
 止じびーワまはは神が御天香語の命を奉りて  
 瀛津世親命を奉り武角の依命を奉りて其の  
 執りしめありておろし二命詔成を奉りて此地を  
 奉りての市舎を建て速秋は速秋津姫の二柱  
 と拜鎮まりて別武角の依命を奉りて其の  
 たまらうとて  
武角の依命のふ縁なりとて  
 撰社  
 ○夢神社 中野の山にありて武角の依命を奉りて其の  
武角の依命のふ縁なりとて

○天照大神宮 ○春日社 ○住吉社 ○八幡宮 あり  
 ○宇賀神社 中野の山にあり ○八王子社 中野の山にあり  
 鳴武神社 中野の山にあり 奉りて神建甕榎命  
 奉りて天香語の命を奉りて速秋は速秋津姫の二柱  
 奉りておろしとて  
 國君より石祠と建てし今に修葺せりなりたまらうとて

香都知神社 中野の山にあり 奉りて神打遇実知命  
 妙景山先德寺遺跡 中野の山にあり  
 堅真音神社 中野の山にあり  
 祭る神神吾田康草津姫命 ○奉りて神打遇実知命  
中野の山にあり ○又日香語の命を奉りて其の



とくたいちり墨崎宮を田とて之脚の畝に灌漑す  
して尋常の斗門よあはれ生考を田水攻めも是より  
水と引しつりまき尋浦とてつりあしつりて  
海濱をりしつりまき尋浦とてつりあしつりて

岡崎御

此地今西○西○小○樹○寺内○門○  
岡崎御の御王御成りてつりあしつりて

生魚石

生魚石の御成りてつりあしつりて  
生魚石の御成りてつりあしつりて

岡崎御

岡崎御の御成りてつりあしつりて  
岡崎御の御成りてつりあしつりて

と洛東大谷をわたりて此地に宇治の墓所ありて  
先延寶六年和歌山宇治領なる火月寺ありて  
已しあり當園一向門乃石碑と建る推輿に  
徒の道骨ありて細あり

弘智王院満願寺

弘智王院満願寺の御成りてつりあしつりて  
弘智王院満願寺の御成りてつりあしつりて

多善菩薩の御成りてつりあしつりて  
多善菩薩の御成りてつりあしつりて

社白の推現の御成りてつりあしつりて  
社白の推現の御成りてつりあしつりて

以上岡崎五ヶ村の産神ありて  
以上岡崎五ヶ村の産神ありて

○大師堂の御成りてつりあしつりて  
○大師堂の御成りてつりあしつりて

夫より八代皇五十二代嵯峨天皇弘仁三年宇治弘法大師  
夫より八代皇五十二代嵯峨天皇弘仁三年宇治弘法大師

諸國中推現の比草創たりたまふとつりあしつりて  
諸國中推現の比草創たりたまふとつりあしつりて

其後一條天皇尚らありて  
其後一條天皇尚らありて



願所<sup>かんじょ</sup>——七<sup>しち</sup>巻<sup>まき</sup>の<sup>の</sup>巻<sup>まき</sup>と<sup>と</sup>造<sup>ぞう</sup>速<sup>すく</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>内<sup>うち</sup>裏<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>  
 救<sup>く</sup>世<sup>せ</sup>大<sup>だい</sup>土<sup>ど</sup>の<sup>の</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>像<sup>ざう</sup>を<sup>を</sup>遷<sup>うつ</sup>し<sup>し</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>火<sup>か</sup>安<sup>あん</sup>置<sup>ち</sup>日<sup>に</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 奉<sup>ほう</sup>堂<sup>どう</sup>よ<sup>よ</sup>お<sup>お</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 崇<sup>たか</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>く<sup>く</sup>一<sup>いつ</sup>字<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>灰<sup>はい</sup>燼<sup>ぜん</sup>日<sup>に</sup>の<sup>の</sup>焼<sup>や</sup>く<sup>く</sup>奉<sup>ほう</sup>る<sup>る</sup>靈<sup>れい</sup>異<sup>い</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>  
 没<sup>ぼつ</sup>入<sup>にゅう</sup>す<sup>す</sup>れ<sup>れ</sup>焼<sup>や</sup>の<sup>の</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>著<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>一<sup>いつ</sup>く<sup>く</sup>猛<sup>まう</sup>焰<sup>えん</sup>乃<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>火<sup>か</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>  
 ぶ<sup>ぶ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>へ<sup>へ</sup>なる<sup>る</sup>梅<sup>うめ</sup>花<sup>か</sup>を<sup>を</sup>奉<sup>ほう</sup>ふ<sup>ふ</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>た<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 お<sup>お</sup>腕<sup>うで</sup>ふ<sup>ふ</sup>四<sup>し</sup>方<sup>ぱう</sup>ふ<sup>ふ</sup>退<sup>たい</sup>教<sup>きやう</sup>誰<sup>たれ</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>奉<sup>ほう</sup>特<sup>とく</sup>に<sup>に</sup>さ<sup>さ</sup>く<sup>く</sup>御<sup>ご</sup>氏<sup>し</sup>さ<sup>さ</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 ぞ<sup>ぞ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ふ<sup>ふ</sup>草<sup>そう</sup>堂<sup>だう</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>奉<sup>ほう</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>そ<sup>そ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 八<sup>はち</sup>月<sup>げつ</sup>を<sup>を</sup>羽<sup>う</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>かう</sup>清<sup>せい</sup>脳<sup>のう</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>す<sup>す</sup>奉<sup>ほう</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>眼<sup>がん</sup>四<sup>し</sup>臂<sup>べい</sup>の<sup>の</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>  
 火<sup>か</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>示<sup>し</sup>現<sup>げん</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>ま<sup>ま</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>

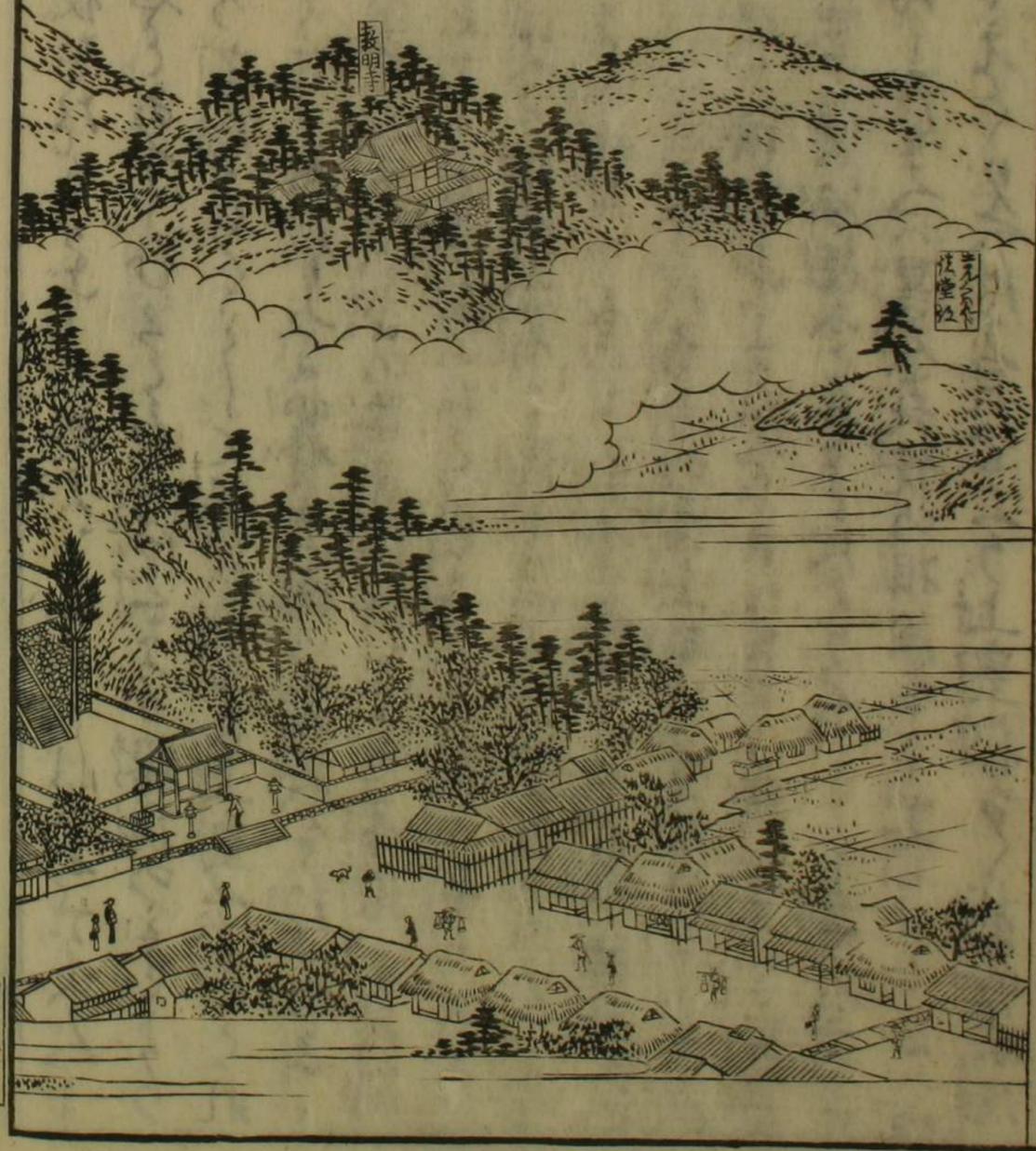
九重の肉ふあつて宝祚と守護已し観月を菩薩より  
今紀の岡寺小勝地をいぬ京城とて遷たると  
ども天皇崇れあつてさるるに  
ととくひまをりて帝の御枕より南  
をさして立たりたまひし小市嶺よりまら平念を  
あつてのくく御譲位あつたまひし崇徳天皇天治二年  
四月上皇 御院 然序清幸の御りてゆ地おたつて靈  
跡と尋みあつてを命とたまつてかたりの荒  
廢已しとていづりたやたまらん唯民とて乃家  
と曰ひし宣ひてあひるの乃あるたつたふ  
もあつたねい重辰襟たのしまをあらたき  
さむねとてまゝあるふ白日像かたねあつても

暗夜をたぐるがごとく思入と毎に  
ありやとあやむとろよとたつ櫻樹の  
一條のまゝくして眼を新まひ上皇  
とりとせしあつて四衢十面を異人を  
たつてとてたつての頼度法師とて其  
ちとあつて異人のつわく我前上皇と  
かつてゆふは更ふたつて消るの  
養とるふ上皇するらるるありて  
たつていふとあつて南方の者主救世菩薩  
らめ朕が願ひとてようあつて  
これとていふとあつて異人を  
く約したまふ異人の相成り  
うたえとていふとあつて上皇

満願寺

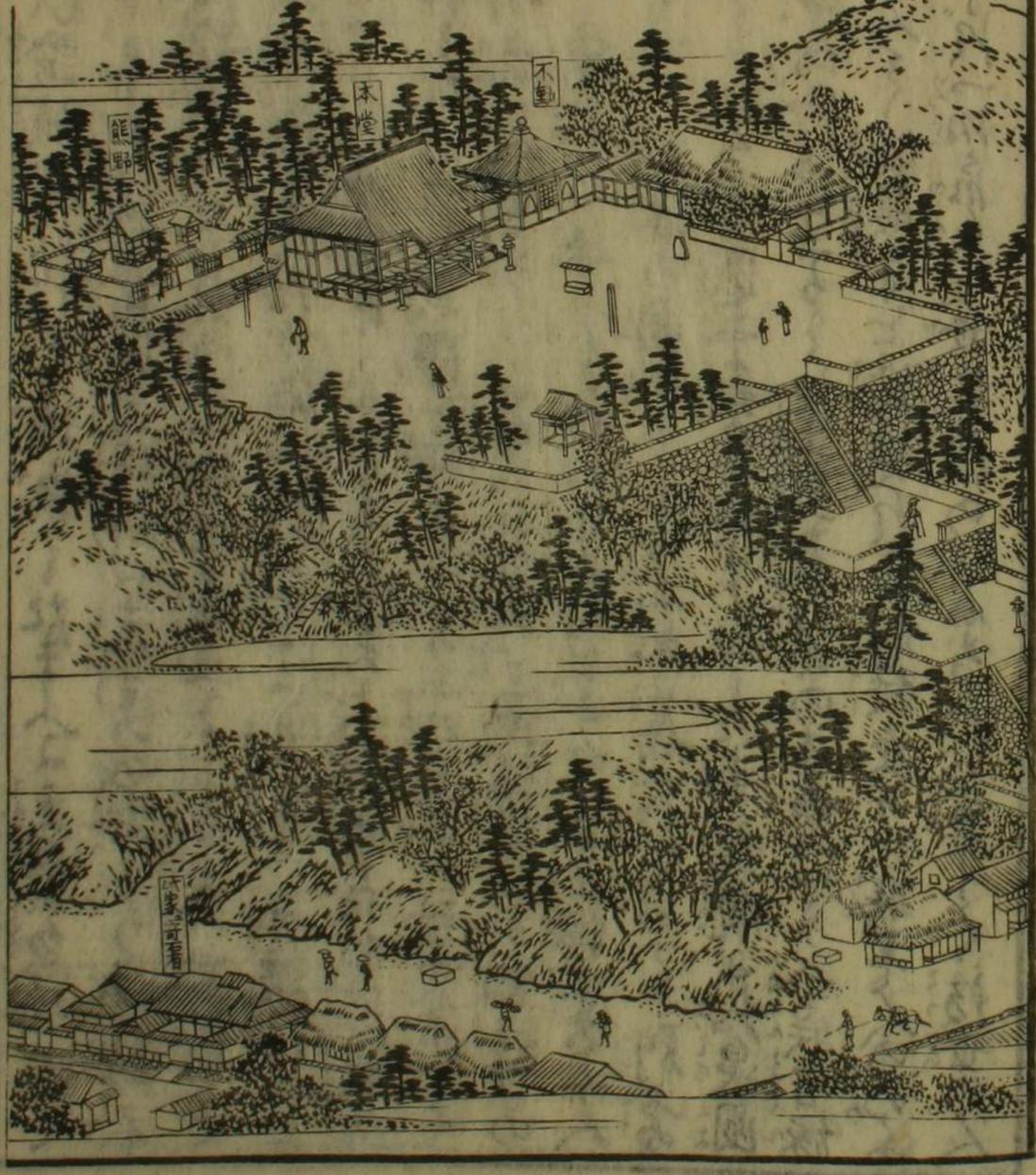
秋郊閑望  
一村桑柘暗  
千畝稻梁肥  
藍水流紅日  
白雲住翠微  
世途榮願薄  
今古賞音稀  
尚愧機心在  
山禽驚却飛  
伊藤長胤

季秋携客  
遊満願寺  
吟行山寺下  
驚見白毫光  
香象凌津渡  
珠衣拂露相



懸泉窓外落  
喬木簷前長  
儻數金繩駐  
遊人奈夕陽  
坂井清洲

満願寺  
懷古  
法勝靈區倚  
翠微寬公謀  
國事空非十  
年空位長無  
恙萬里投荒  
獨不歸蛻骨  
一簪童子手  
鮫珠幾瀉老  
僧衣祇今談  
合猶留谷精  
舍重逢佛日  
丹坪



あし證誠殿に於て通夜したまふは天皇忽然として  
現とさるり於當國出崎郡の末生の心より佛縁不  
乏の靈地あるを陳ふゆ盛建立す一ゆふ冥福と  
らふ慶大をせんさあふひたまふは其地の守護神と  
さるべしと神告あはせりし上皇隨在の御洞不  
くもせたまふ未禪と四くさるる乃ち右司公下じこ  
大伽藍と造立し一るひ慈母之所推現と勸誘あ  
つて鎮守の社々神田寺依と考りしは頼房上人  
もつて中真の因祖と一は四郎義家とつて別ある  
職と一かく還幸をうたまふは車駕既を和泉國  
の中御あつて上皇た方々のあやう今朕有縁  
ひより満願寺と造建はるは保あつて朕を人のあふ  
あはれ一切を生二世安樂のあまれば一後世の人

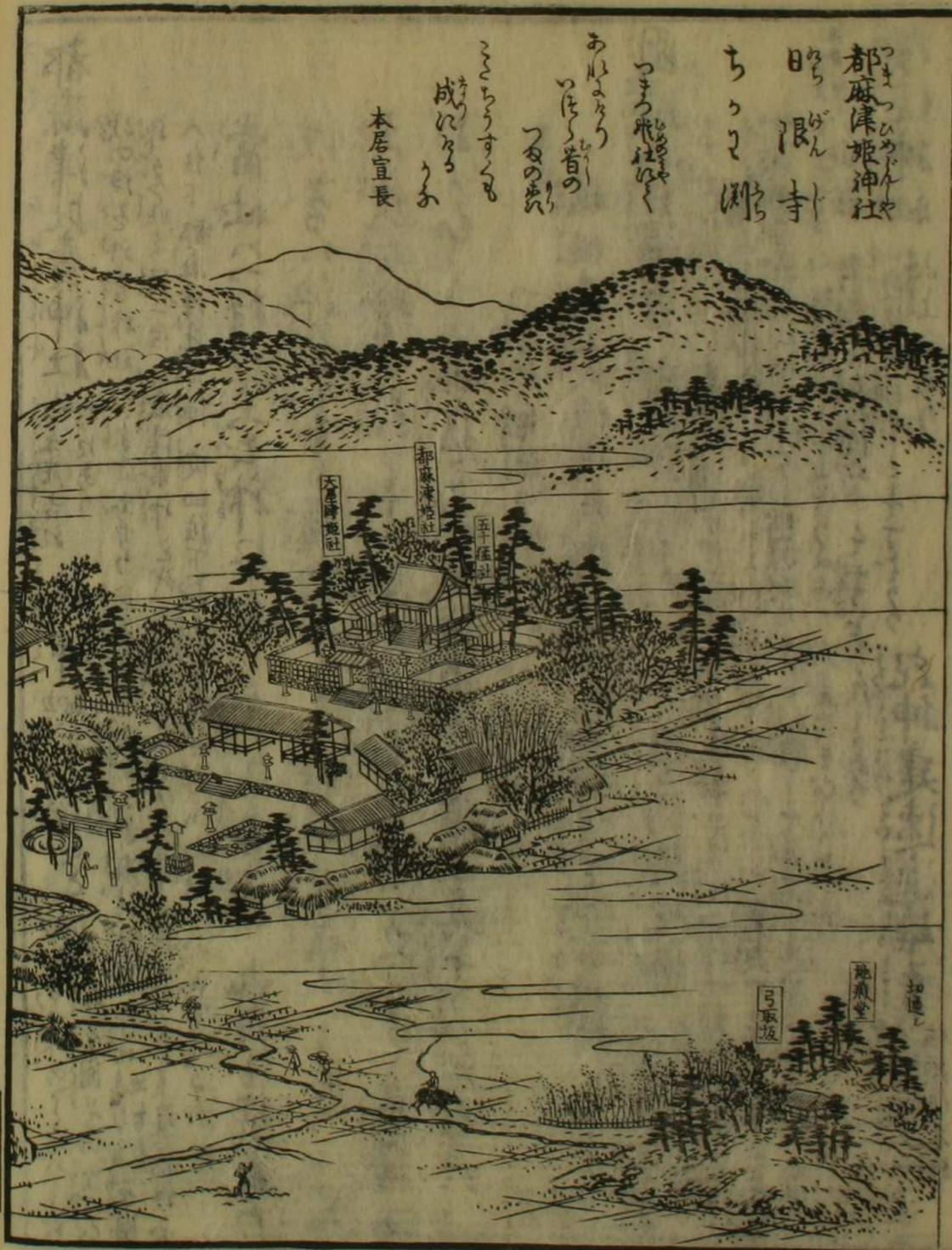
とて朕後願のまはきしじやとて震縮の額  
此類の天の無火 ねむい震縮の神背像はたかひんふ副たぬ  
又焼亡りし 終に還幸をうたまふは上皇の中真のたど那  
ひそあゆみのあはれ其結構を大なること七を伽藍具足  
し僧坊二十六區にあらうし中葉教度の火火を燒  
亡りし十とをも存せしむるは其おひのひの地を  
このゆりぬりし證とせよ 是後師の内寺内村門本村のあふ  
○竹室を羽院寺に宿る像 ○月寺を方 ○崇徳院に師  
○震縮 ○涅槃像 ○傳教大師像 ○慈覺大師像  
○師幸記 日過滿願寺之間僧等忽喚入每度日前之御幸帶奉此寺先例云々  
慈覺大師官相具所誦經物僧等祿之少之由不似先例願比與也僧慈覺昇此盤  
之間退却云々  
○東草集 日紀州滿願寺供養文云夫以精舍締稱勝善之衆中佛  
閣成死功添供養之莊嚴調高顯如雲構飾讚莫之齋席加之本佛十一  
通大誓重開青蓮慈悲之佛眼二四軸莫文新揚白蓮譬喻之名  
題乃至負和三年丁亥二月十八日



寂々古祠中  
一望塵慮空  
夏天不知暑  
倚杖聽松風  
相江山人



都麻津姫神社  
昭限寺  
ちりこ淵  
あはれなる  
つらさ首の  
つらさの  
まじらうすも  
成りたる  
うみ  
本居宣長



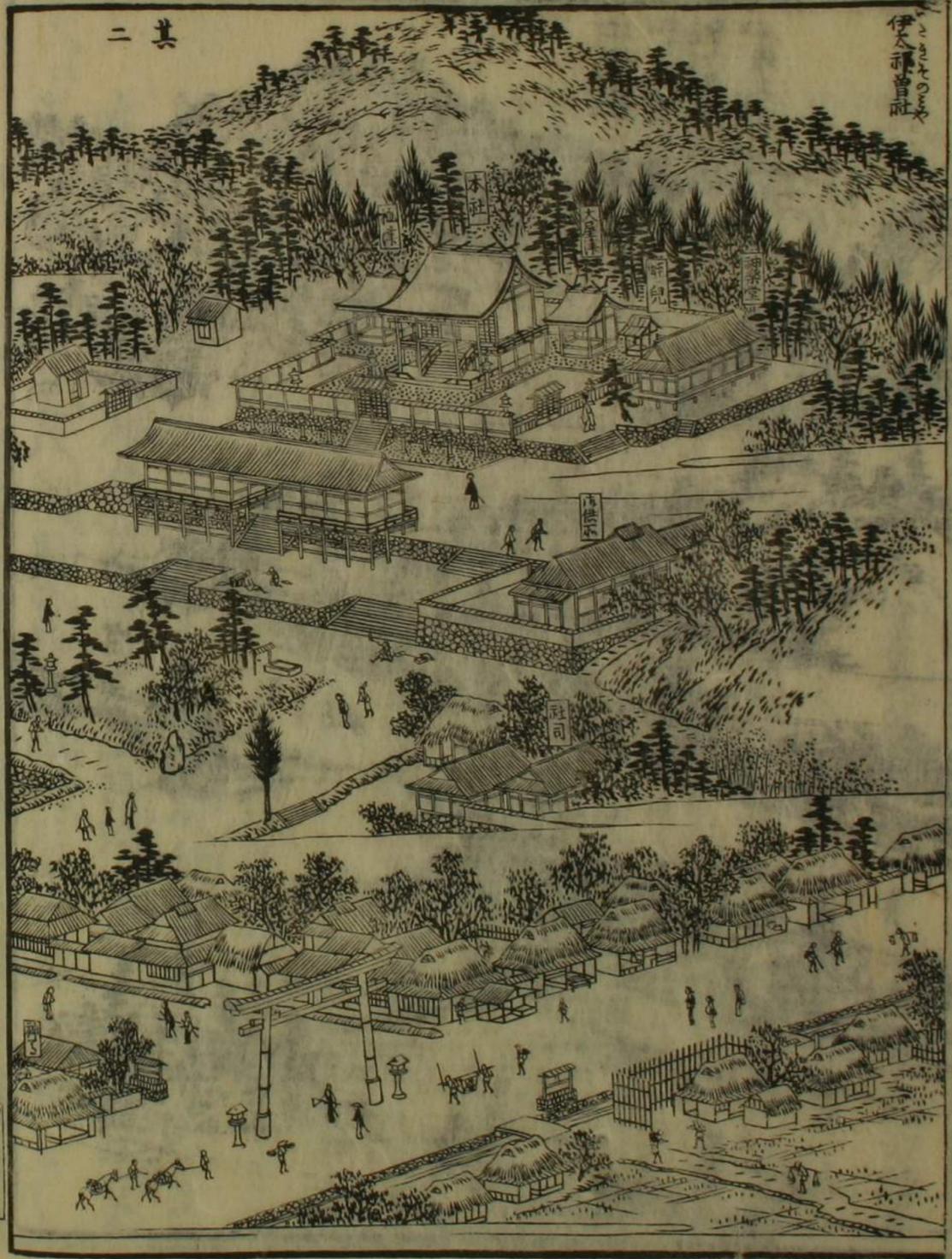


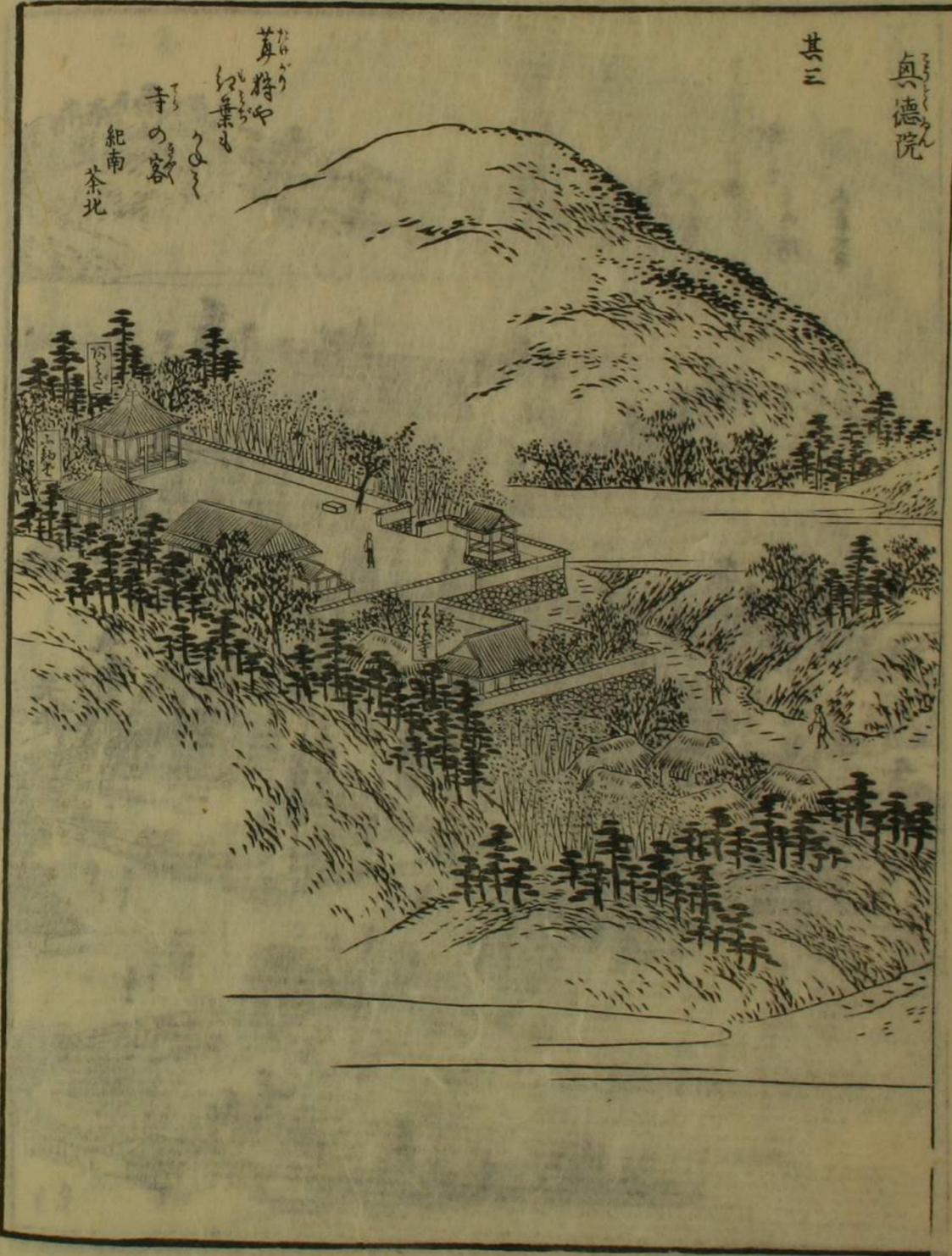


也社司がひの須佐村の在宣其外社家のめんく神楽を女体人  
 宮仕末のも歳重の神りらりたり還神の後流瀧馬をひい  
 諸願成就の敷る末のこあり奉文にらりくん

延喜式神名帳云伊太祁曾神社神大月次本國神名帳云正一位勲一等伊太祁曾  
 大神文德錄實曰嘉祥三年冬十月壬子授紀伊國伊太祁曾神二從五位下云甲子  
 遺左馬助從五位下紀朝臣貞幸向紀伊國伊太祁曾神社策命曰天皇我詔  
 旨申給久御冠授奉嶺祈申賜此之依天從五位下乃御司上奉利崇奉曾狀乎御位  
 記令持天奉出須此狀手聞食天天皇朝廷乎常盤堅盤令護幸奉止倍申給以申三代實  
 錄曰貞觀元年正月廿七日甲申紀伊國從五位下伊太祁曾神二授從四位上陽成  
 天皇元慶七年十二月廿八日庚申授紀伊國從四位下伊太祁曾神二從四位上日本紀  
 畧曰延喜六年二月七日授紀伊國伊太祁曾明神二正四位上

當社の大神の神代のひらり此地は座座くひんとも  
 本國とらる縁の則けに柱の神神をまきしけりそをりこみえに  
 の神神をまき鳥さるのふまきしけり初まき鳥さるるりみ  
 新羅國より大陰まきしけりそをり持持しらりりりは  
 たりふこりね韓地ぬの極だて盡持ゆりり遠く飛ぶる  
 たりりてんく大八洲國の内ふ播植たまひぶる處もやうく





まゝにあらざるかゝるも一そとて五十猛神瓜紘へ有  
 功之神とあり 日本紀の五十猛の五十の勢とて瓜の纏を速る  
 して後を神の事と契沖河因梨の魯のまの流ありとて有  
 神とあり 今國人の都と かくこの國に流るる神とて  
 依りて能ゆるふとて 五十猛神とて大屋毘古神とて大板元京の用と  
 云ねるもふふと右の神あり 全名をてたると主とて  
 本國とあり 大屋津姫命もこれとて  
 負たてり 妻は四方赤らりとて  
 妻は四方赤らりとて 初は所不獲坐  
 初は所不獲坐 平田庄を田表  
 麻津比賣神 かねて  
 かねて 今僅に  
 今僅に ホより集  
 ホより集 神事  
 神事 此日  
 此日 流  
 流

伊太祁曾社九月十五日  
御祭禮之圖



其外諸願成就の致馬々々神奈のる坊々々行々々あり其也  
 仕觀たりこれ則永祿元年風々の送風なりと云  
八月三日三箇の町ありて出くはまて一箇となり日一十二日より三三三と  
 なる能起りく人畜も本は接人ともなるなり一りり一り別この御をける神社に  
 勅使とありたまひ飛鳥の御立立あり一りり一り立立ともなるなり一りり一り  
 くり一りり一りり一りり一りり一りり一りり一りり一りり一りり一りり一りり  
 中世この御をける神社に  
 今の沖核所夫田村をいひは松林村をいひは諸社の松林村をいひは  
 神官の家宅簷とぬき整たり諸人雜皆とぬき陰晴瓜瓞  
 瓜々神樂の歌々々々庭々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 倫盤は波板々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々  
 倫音は去門院の御をける神社に  
 倫音は去門院の御をける神社に

亀尾山徳院延壽寺

風光二月鎌山春楊柳會烟桃李新宮上長懸雲五色樓前廣樂欲驚人

奉る河弥陀佛  
 春日の作

伊太祁曾社

坂井清洲



護摩堂 安房法大附作

大際堂 弘法大師の像作はるなり、平尾村にあり、四六八十八年九月の二十

妻御前社 平尾村にあり、奉圓行名は日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

平尾王子 同、村にあり、先達計奉圓王子次泰松坂、王子は平尾王子

大悲の観音寺 同、村にあり、奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

観音堂 同、村にあり、奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

大田山傳法院明王寺 根来山にあり、奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

大日堂 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

大師堂 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

不動堂 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

白の権現行 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

妙見行 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

不動瀑布 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

初高彦 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

比大傳法院と造る 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

建ち 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

上人の圍 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

根来山 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

弘法大師入唐傳 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

大際 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

このの錐鑽 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

聴 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

奉寺の悉 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

この根来山 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

當山 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

當山 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

當山 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟

當山 奉圓行の棟、日蓮一位妻御前、此堂は奉圓行の棟



山松多露  
 滴林下擢  
 秋空幽跡  
 元難實清  
 香却不輕  
 餐非黃菊落  
 採豈紫芝榮  
 坐遇人相贈  
 塵寰慰此生  
 明霞

志々傳法院と号したまふ是實に崇徳天皇保延六年  
 の事と云ふ此當山乃靈區と云ふやめる佛因のありの事あり  
 たりと云ふ當郷伊太祈曾大神の奥の院とて供僧の輩  
 あり酒髪にして當村に住し毎年神輿の渡御いとも厳重と云ふ  
 神佛一如のこころありあらば尤も仰の氣色跡まじかり  
 たりと云ふ諸堂巍然として一方の大巨刹ありとて天正十三年  
 三月根來寺の火と共に灰燼に今僅に其遺址存する事と云ふ  
 丹生神社 明王寺村にありまうらうと丹生律姫神あり伊太祈曾神の  
 本社にあり土人雨の宮と云ふ  
 天宮 本國神名帳に云天手カ男神  
 丹生神社 伊太祈曾神の境内あり  
 足守明神祠 同村上野山觀音寺の境内あり土人云う伊太祈曾神社に諸國  
 里俗のその故と云ふあるかきやうのその世にまこと多しと云ふ  
 斯詞備の備乃音便の美と云ふは書記の一書に有物若草牙生於空  
 中因此化神號天常立尊可美草牙彦男尊と云ふ事草牙彦男尊を共思

永山名産松菌

永山村の東南なる山にあり季秋のころはほたけのこけし生ずる  
府城の賈賤はとひそく樹をたけ丸居の傍地あり

松茸

祇南海

乍穿朽葉獨下然原出蟠根倚半天羽蓋曾遺避雨客  
瓊芝誤采巢雲仙滿山香氣桂花後一味風流菊蕊前王  
菜金叢舊相識自差塵土未辭縁

あしやんりりもあはれ外さじ見けん人のねやと真将 浪華 紫苗道人  
松茸 やんよとくろく鼻乃とさ 去 來

楊柳山寶光寺

黒岩村の山八町をく山の上にあり  
弘法大師新義根來寺に属り

本尊不動明王

弘法大師の像  
一とたけ一尺

眼檀阿彌陀佛

弘法大師の所作  
の飛泉より出現したまる一丈八歩乃

楊柳觀世音

弘法大師の像  
當國に四十八所と傳へて

大師堂

弘法大師の像  
當國に四十八所と傳へて

鎮守社

弘法大師の像  
當國に四十八所と傳へて

楊柳の飛泉

弘法大師の像  
當國に四十八所と傳へて

當山(去) 天長六年春二月弘法大師諸国に遍教をなすへる







